

藪の中

芥川龍之介

青空文庫

検非違使けびいしに問われたる木樵きこりの物語

さようでございます。あの死骸しがいを見つけたのは、わたしに違ちがい
 ございませぬ。わたしは今朝けさいつもの通り、裏山の杉を伐きりに参
 りました。すると山陰やまかげの藪やぶの中に、あの死骸があつたのでござ
 います。あつた処でございますか？ それは山科やましなの駅路からは、
 四五町ほど隔たつて居りましょう。竹の中に瘦やせ杉の交まじつた、人
 気とけのない所でございます。

死骸はなだは縹すいかんの水干みやくふうに、都風みやこふうのさび烏帽子をかぶつたまま、
 仰向あおむけに倒れて居りました。何しろ一ひとかたな刀とは申すものの、胸

もとの突き傷でございますから、死骸のまわりの竹の落葉は、蘇す芳ほうに滲しみたようでございます。いえ、血はもう流れては居りません。傷口も乾かわいて居わつたようでございます。おまけにそこには、馬うま蠅ばえが一匹、わたしの足音も聞えないように、べつたり食いつついて居わりましたつけ。

太刀たちか何かは見えなかつたか？　いえ、何もございません。ただその側の杉の根がたに、縄なわが一筋落ちて居わりました。それから——そうそう、縄のほかにも櫛くしが一つございました。死骸のまわりにあつたものは、この二つぎりでございます。が、草や竹の落葉は、一面に踏み荒されて居わりましたから、きつとあの男は殺ころされる前に、よほど手痛い働きでも致いたしたのに違ちがいございません。

何、馬はいなかったか？ あそこは一体馬なぞには、はいれない所でございます。何しろ馬の通う路かよとは、藪一つ隔たつて居りますから。

検非違使に問われたる旅法師たびほうしの物語

あの死骸の男には、確かに昨日きのうあ遇つて居ります。昨日の、——
 さあ、午頃ひるごろでございましょう。場所は関山せきやまから山科やましなへ、参ろうと云う途中でございます。あの男は馬に乗った女と一しよに、関山の方へ歩いて参りました。女は牟子むしを垂れて居りましたから、顔はわたしにはわかりません。見えたのはただ萩はぎ重ねらしい、

衣きぬの色ばかりでございます。馬は月毛つきげの、——確か法師ほうし髪がみの馬のようでございました。丈たけでございますか？ 丈は四寸よきもござい
ましたか？ ——何しろ沙門しゃもんの事でございますから、その辺は
はつきり存じません。男は、——いえ、太刀たちも帯びて居おれば、弓
矢たずさも携たずさえて居りました。殊に黒い塗ぬりえびら箆へへ、二十あまり征矢そやをさ
したのは、ただ今でもはつきり覚えて居ります。

あの男がかようになるとは、夢にも思わずに居りましたが、
真まことに人間まことの命いのちなぞは、によろやくくによでん、如露亦如電に違ちがいございません。やれや
れ、何とも申しようのない、気の毒な事を致しました。

検非違使けんひゐしに問とわれたる放免ほうめんの物語

わたしが搦め取った男でございますか？　これは確かに多襄たじよう
まる丸と云う、名高い盗人ぬすびとでございます。もつともわたしからが搦め
 取った時には、馬から落ちたのでございましょう、粟田口あわだぐちの石
しばし橋の上に、うんうん呻うなつて居りました。時刻でございますか？
 時刻は昨夜さくやの初更しよせう頃でございます。いつぞやわたしとらが捉え損
 じた時にも、やはりこの紺こんの水干すいかんに、打出うちだしの太刀たちを佩はいて居
 りました。ただ今はそのほかにも御覧の通り、弓矢の類たずささえ携たずさえ
 て居ります。さようでございますか？　あの死骸の男が持つてい
 たのも、——では人殺しを働いたのは、この多襄丸たじように違いござい
 ません。革かわを巻いた弓、黒塗りの箆えびら、鷹たかの羽の征矢そやが十七本、――

—これは皆、あの男が持っていたものでございましょう。はい。馬もおつしやる通り、法師ほうし髪がみの月毛つきげでございませう。その畜ちくしよ生うに落おされるとは、何かの因縁いんねんに違ちがいございません。それは石橋いしはしの少すくし先さきに、長ながい端綱はづなを引ひいたまま、路ぢばたの青芒あおすずきを食くつて居ゐりました。

この多囊丸たじようまると云いうやつは、洛中らくちゆうに徘徊徘徊する盗人盗人の中中でも、女好き女好きのやつでございませう。昨年昨年の秋鳥部寺とりべでらの寶頭盧びんずるのうしろ後の山うしろに、物詣ものもうでに来きたららしい女房にようぼうが一人一人、女めの童わらわと一ひとしよに殺ころされていたのは、こいつの仕業しわざだとか申まして居ゐりました。その月毛つきげに乗のつていた女にも、こいつがあの男を殺ころしたとなれば、どこへどうしたかわかりません。差出さしでがましゆうございませうが、それも御詮ごせ

議んぎ下くださいまし。

檢非違使に問われたる媼おうなの物語

はい、あの死骸は手前の娘が、片附かたづいた男でございます。が、都のものではございませぬ。若狭わかさの国府こくふの侍でございます。名は金沢かなざわの武弘、年は二十六歳でございました。いえ、優しいきだて気立でございますから、遺恨いこんなぞ受ける筈はございませぬ。

娘でございますか？ 娘の名は真砂まさご、年は十九歳でございます。これは男にも劣らぬくらい、勝気かちかの女でございしますが、まだ一度も武弘のほかには、男を持った事はございませぬ。顔は色の浅黒

い、左の眼尻めじりに黒子ほくろのある、小さい瓜実顔うりぎねがおでございます。

武弘は昨日きのう娘と一しよに、若狭へ立つたのでございますが、こんな事になりますとは、何と云う因果でございましょう。しかし娘はどうになりましたやら、婿むこの事はあきらめましても、これだけは心配でなりません。どうかこの姥うばが一生のお願いでございますから、たとい草木くさきを分けましても、娘の行方ゆくえをお尋ね下さいまし。何に致せ憎いのは、その多襄丸たじようまるとか何とか申す、盗人ぬすびとのやつでございます。婿ばかりか、娘までも………（跡は泣き入りて言葉なし）

×

×

×

たじようまる
多襄丸の白状

あの男を殺したのはわたしです。しかし女は殺しはしません。ではどこへ行ったのか？ それはわたしにもわからないのです。まあ、お待ちなさい。いくら拷問ごうもんにかけられても、知らない事は申されますまい。その上わたしもこうなれば、卑怯ひきような隠し立てはしないつもりです。

わたしは昨日きのうの午少ひるし過ぎ、あの夫婦に出会いました。その時風の吹いた拍子ひょうしに、牟子むしの垂絹たれぎぬが上ったものですから、ちらりと女の顔が見えたのです。ちらりと、——見えたと思う瞬間に

は、もう見えなくなつたのですが、一つにはそのためもあつたのでしよう、わたしにはあの女の顔が、女菩薩によぼさつのように見えたのです。わたしはその咄嗟とつさの間に、たとい男は殺しても、女は奪おうと決心しました。

何、男を殺すなどは、あなた方の思っているように、大した事ではありません。どうせ女を奪うばうとなれば、必ず、男は殺されるのです。ただわたしは殺す時に、腰の太刀たちを使うのですが、あなた方は太刀は使わない、ただ権力で殺す、金で殺す、どうかするとおためごかしの言葉だけでも殺すでしょう。なるほど血は流れない、男は立派りっぱに生きている、——しかしそれでも殺したのです。罪の深さを考えて見れば、あなた方が悪いか、わたしが悪いか、

どちらが悪いかわかりません。（皮肉なる微笑）

しかし男を殺さずとも、女を奪う事が出来れば、別に不足はない訳です。いや、その時の心もちでは、出来るだけ男を殺さずに、女を奪おうと決心したのです。が、あの山科やましなの駅路では、とてもそんな事は出来ません。そこでわたしは山の中へ、あの夫婦をつれこむ工夫くふうをしました。

これも造作ぞうさはありません。わたしはあの夫婦と途みちづれになると、向うの山には古塚ふるづかがある、この古塚を発あばいて見たら、鏡や太刀たちが沢山出た、わたしは誰も知らないように、山の陰の藪やぶの中へ、そう云う物を埋うずめてある、もし望み手があるならば、どれでも安い値に売り渡したい、——と云う話をしたのです。男はいつかわ

たしの話に、だんだん心を動かし始めました。それから、——どうです。欲と云うものは恐しいではありませんか？ それから半んとき時ときもたたない内に、あの夫婦はわたしと一しよに、山路やまみちへ馬を向けていたのです。

わたしは藪やぶの前へ来ると、宝はこの中に埋めてある、見に来てくれと云いました。男は欲かわに渴かわいていますから、異存いぜんのある筈はありません。が、女は馬も下りずに、待っていると云うのです。またあの藪の茂っているのを見ては、そう云うのも無理はありません。すまい。わたしはこれも実を云えば、思つぼう壺つぼにはまったのですから、女一人を残したまま、男と藪の中へはいりました。

藪はしばらくの間あいだは竹ばかりです。が、半はんちよう町ちようほど行つた処

に、やや開いた杉むらがある、——わたしの仕事を仕遂げるのは、これほど都合つごうの好い場所はありません。わたしは藪を押し分けながら、宝は杉の下に埋めてあると、もつともらしい嘘をつきました。男はわたしにそう云われると、もう痩やせ杉が透いて見える方へ、一生懸命に進んで行きます。その内に竹が疎まばらになると、何本も杉が並んでいる、——わたしはそこへ来るが早いか、いきなり相手を組み伏せました。男も太刀を佩はいているだけに、力は相当にあつたようですが、不意を打たれてはたまりません。たちまち一本の杉の根がたへ、括くりつけられてしまいました。縄なわですか？ 縄は盗ぬすびと人の有難さに、いつ塀を越えるかわかりませんか。ちやんと腰につけていたのです。勿論声を出させないために

も、竹の落葉を頼張ほわばらせれば、ほかに面倒はありません。

わたしは男を片付けてしまうと、今度はまた女の所へ、男が急病を起したらしいから、見に来てくれと云いに行きました。これ

も凶星ずぼしに当たつたのは、申し上げるまでもありますまい。女は市いちめ

女笠がさを脱いだまま、わたしに手をとられながら、藪の奥へはい

つて来ました。ところがそこへ来て見ると、男は杉の根に縛しばられ

ている、——女はそれを一目見るなり、いつのまに懐ふところから出して

いたか、きらりと小刀さすがを引き抜きました。わたしはまだ今までに、

あのくらい気性の烈はげしい女は、一人も見つた事がありません。もし

その時でも油断していたらば、一突きに脾腹ひばらを突かれたでしょう。

いや、それは身を躲かわしたところが、無二無三むにむざんに斬り立てられる内

には、どんな怪けが我も仕兼ねなかつたのです。が、わたしも多たじよう囊ふち丸まるですから、どうにかこうにか太刀も抜かずに、とうとう小刀さすを打ち落しました。いくら気の勝つた女でも、得物がなければ仕方ありません。わたしはどうとう思い通り、男の命は取らずとも、女を手に入れる事は出来たのです。

男の命は取らずとも、——そうです。わたしはその上にも、男を殺すつもりはなかつたのです。所が泣き伏した女を後あとに、藪の外へ逃げようとすると、女は突然わたしの腕へ、氣違ひのようにすが縋すがりつきました。しかも切れ切れに叫ぶのを聞けば、あなたが死ぬか夫が死ぬか、どちらか一人死んでくれ、二人の男に恥はじを見せるのは、死ぬよりもつらいと云うのです。いや、その内どちらに

しろ、生き残った男につれ添いたい、——それも喘ぎ喘ぎ云うのです。わたしはその時猛然と、男を殺したい気になりました。

(陰鬱なる興奮)

こんな事を申し上げると、きつとわたしはあなた方より残酷な人間に見えるでしょう。しかしそれはあなた方が、あの女の顔を見ないからです。殊にその一瞬間の、燃えるような瞳ひとみを見ないからです。わたしは女と眼を合せた時、たとい神鳴かみなりに打ち殺されても、この女を妻にしたいと思いました。妻にしたい、——わたしの念頭ねんとうにあつたのは、ただこう云う一事だけです。これはあなた方の思うように、卑いやしい色欲ではありません。もしその時色欲のほかに、何も望みがなかったとすれば、わたしは女を蹴倒けたお

しても、きつと逃げてしまったでしょう。男もそうすればわたしの太刀たちに、血を塗る事にはならなかつたのです。が、薄暗い藪の中に、じつと女の顔を見た刹那せつな、わたしは男を殺さない限り、ここは去るまいと覚悟しました。

しかし男を殺すにしても、卑怯ひきような殺し方はしたくありません。わたしは男の縄を解いた上、太刀打ちをしると云いました。（杉の根がたに落ちていたのは、その時捨て忘れた縄なのです。）男は血相けつそうを変えたまま、太い太刀を引き抜きました。と思うと口も利きかずに、憤然とわたしへ飛びかかりました。——その太刀打ちがどうなったかは、申し上げるまでもありますまい。わたしの太刀は二十三合目ごうめに、相手の胸を貫きました。二十三合目に、—

—どうかそれを忘れずに下さい。わたしは今でもこの事だけは、感心だと思つて居るのです。わたしと二十合斬り結んだものは、天下にあの男一人だけですから。（快活なる微笑）

わたしは男が倒れると同時に、血に染まった刀を下げたなり、女の方を振り返りました。すると、———どうです、あの女はどこにもいないではありませんか？ わたしは女がどちらへ逃げたか、杉むらの間を探してみました。が、竹の落葉の上には、それらしい跡あとも残つていません。また耳を澄ませて見ても、聞えるのはただ男の喉のどに、断だん末まつ魔まの音がするだけです。

事によるとあの女は、わたしが太刀打を始めるが早いか、人の助けでも呼ぶために、藪をくぐつて逃げたのかも知れない。———

わたしはそう考えると、今度はわたしの命ですから、太刀や弓矢を奪つたなり、すぐにまたもとの山路へ出ました。そこにはまだ女の馬が、静かに草を食っています。その後の事は申し上げるだけ、無用の口数に過ぎますまい。ただ、都へはいる前に、太刀だけはもう手放していました。——わたしの白状はこれだけです。どうせ一度は櫓の梢に、懸ける首と思つていきますから、どうか極刑に遇わせて下さい。（昂然たる態度）

清水寺に来れる女の懺悔

——その紺の水干を着た男は、わたしを手ごめにしてしまう

と、縛られた夫を眺めながら、嘲あざけるように笑いました。夫はどんなに無念だったでしょう。が、いくら身悶みもだえをしても、体からだ中じゆうにかかった縄目なわめは、一層ひしひしと食い入るだけです。わたしは思わず夫の側へ、転ぶころように走り寄りました。いえ、走り寄ろうとしたのです。しかし男は咄嗟とつさの間に、わたしをそこへ蹴倒あいだしました。ちようどその途端とたんです。わたしは夫の眼の中に、何とも云いようのない輝きが、宿とどっているのを覚さとりました。何とも云いようのない、——わたしはあの眼を思い出すと、今でも身震みふるいが出ずにはいられません。口さえ一いちごん言も利きけない夫は、その刹那せつなの眼の中に、一切の心を伝えたのです。しかしそこに閃ひらめいていたのは、怒りでもなければ悲しみでもない、——ただわたしを蔑さげんだ、

冷たい光だったではありませんか？ わたしは男に蹴られたよりも、その眼の色に打たれたように、我知らず何か叫んだぎり、とうとう氣を失ってしまいました。

その内にやっと氣がついて見ると、あの紺こんの水干すいかんの男は、もうどこかへ行っていました。跡にはただ杉の根がたに、夫が縛しばられていただけです。わたしは竹の落葉の上に、やっと体を起したなり、夫の顔を見守りました。が、夫の眼の色は、少しもさつきと変わりません。やはり冷たい蔑さげすみの底に、憎しみの色を見せているのです。恥しさ、悲しさ、腹立たしさ、——その時のわたしの心の中うちは、何と云えば好よいかわかりません。わたしはよろよろ立ち上りながら、夫の側へ近寄りました。

「あなた。もうこうなつた上は、あなたと御一しよには居られません。わたしは一思いに死ぬ覚悟です。しかし、——しかしあなたもお死になすつて下さい。あなたはわたしの恥はじを御覧になりました。わたしはこのままあなた一人、お残し申す訳には参りません。」

わたしは一生懸命に、これだけの事を云いました。それでも夫は忌いまわしそうに、わたしを見つめているばかりなのです。わたしは裂さけそうな胸を抑えながら、夫の太刀たちを探しました。が、あの盗ぬすびと人に奪われたのでしよう、太刀は勿論弓矢ささえも、藪の中には見当りません。しかし幸い小刀さすがだけは、わたしの足もとに落ちていたのです。わたしはその小刀を振り上げると、もう一度夫に

こう云いました。

「ではお命を頂かせて下さい。わたしもすぐにお供します。」

夫はこの言葉を聞いた時、やっと唇を動かしました。勿論口には笹の落葉が、一ぱいにつまっていますから、声は少しも聞えません。が、わたしはそれを見ると、たちまちその言葉を覚りました。夫はわたしを蔑んだまま、「殺せ。」と一言云つたのです。わたしはほとんど、夢うつつの内に、夫の縹はなだの水干の胸へ、ずぶりと小刀さすがを刺し通しました。

わたしはまたこの時も、気を失ってしまったのでしよう。やつとあたりを見まわした時には、夫はもう縛られたまま、とうに息が絶えていました。その蒼ざめた顔の上には、竹に交まじった杉むら

の空から、西日が一すじ落ちていゝるのです。わたしは泣き声を吞みながら、死骸しかいの縄を解き捨てました。そうして、——そうしてわたしはどうなつたか？ それだけはもうわたしには、申し上げる力もありません。とにかくわたしはどうしても、死に切る力がなかつたのです。小刀さすを喉のどに突き立てたり、山の裾の池へ身を投げたり、いろいろな事もして見ましたが、死に切れずにこうしてゐる限り、これも自慢じまんにはなりません。 (寂しき微笑) わたしのように腑甲斐ふがいないものは、大慈大悲の観世音菩薩かんぜおんぼさつも、お見放しなすつたものかも知れません。しかし夫を殺したわたしは、盗ぬ人の手ごめに遇つたわたしは、一体どうすれば好よいのでしょうか？ 一体わたしは、——わたしは、—— (突然烈しき歎すすりなき 歎)

巫女みこの口を借りたる死霊の物語

——盗ぬすびと人は妻を手ごめにすると、そこへ腰を下したまま、いろいろ妻を慰め出した。おれは勿論口は利きけない。体も杉の根に縛しばられている。が、おれはその間あいだに、何度も妻へ目くばせをした。この男の云う事を真まに受けるな、何を云つても嘘と思え、——おれはそんな意味を伝えたいと思つた。しかし妻は悄しょうぜん然ぜんと笹の落葉に坐つたなり、じつと膝へ目をやっている。それがどうも盗人の言葉に、聞き入っているように見えるではないか？ おれは妬ねたましさに身悶みもたえをした。が、盗人はそれからそれへと、巧妙に話を進めている。一度でも肌身を汚したとなれば、夫との仲も折り

合うまい。そんな夫に連れ添っているより、自分の妻になる気はないか？ 自分はいとしいと思えばこそ、大それた真似も働いたのだ、——盗人はとうとう大胆だいたんにも、そう云う話さえ持ち出した。

盗人にこう云われると、妻はうつとりと顔を擡もたげた。おれはただあの時ほど、美しい妻を見た事がない。しかしその美しい妻は、現在縛られたおれを前に、何と盗人に返事をしたか？ おれは中ちゆう有ゆうに迷っていても、妻の返事を思い出すごとに、嗔しん恚いに燃えなかつたためしはない。妻は確かにこう云つた、——「ではどこへでもつれて行つて下さい。」（長き沈黙）

妻の罪はそれだけではない。それだけならばこの闇やみの中に、い

まほどおれも苦しみはしまい。しかし妻は夢のように、盗人に手をとられながら、藪の外へ行こうとすると、たちまち顔がんしよく色を失ったなり、杉の根のおれを指さした。「あの人を殺して下さい。わたしはあの人が生きていては、あなたと一しよにはいられませんが。」——妻は気が狂ったように、何度もこう叫び立てた。「あの人を殺して下さい。」——この言葉は嵐のように、今でも遠い闇の底へ、まっ逆さかさま様におれを吹き落そうとする。一度でもこのくらい憎むべき言葉が、人間の口を出た事があるか？ 一度でもこのくらい呪のろわしい言葉が、人間の耳に触れた事があるか？ 一度でもこのくらい、——（突然ほとばし迸るごとき嘲ちやうしやう笑）その言葉を聞いた時は、盗人さえ色を失ってしまった。「あの人を殺し

て下さい。」——妻はそう叫びながら、盗人の腕に縋すがっている。

盗人はじつと妻を見たまま、殺すとも殺さぬとも返事をしない。

——と思うか思わない内に、妻は竹の落葉の上へ、ただ一蹴りに

蹴倒けたおされた、（再びふたたび迸るごとき嘲笑）盗人は静かに両腕を組むと、

おれの姿へ眼をやった。「あの女はどうするつもりだ？ 殺すか、

それとも助けてやるか？ 返事はただ領うなずけば好よい。殺すか？」——

——おれはこの言葉だけでも、盗人の罪は赦ゆるしてやりたい。（再び、

長き沈黙）

妻はおれがためらう内に、何か一ひとこえ声叫ぶが早いか、たちまち

藪の奥へ走り出した。盗人も咄嗟とっさに飛びかかったが、これは袖そでさ

え捉とらえなかつたらしい。おれはただ幻のように、そう云う景色を

眺めていた。

盗人は妻が逃げ去った後、太刀や弓矢を取り上げると、一箇所だけおれの縄を切った。なわ「今度はおれの身の上だ。」——おれは盗人が藪の外へ、姿を隠してしまう時に、こう呟いたのを覚えて
いる。その跡はどこも静かだった。いや、まだ誰かの泣く声がある。おれは縄を解きながら、じつと耳を澄ませて見た。が、その声も気がついて見れば、おれ自身の泣いている声だったではないか？
(三度、みたび長き沈黙)

おれはやつと杉の根から、疲れ果てた体を起した。おれの前には妻が落した、小刀が一つ光っている。さすがおれはそれを手にとると、一突きにおれの胸へ刺した。さ何か腥い塊がおれの口へこみ上げて

来る。が、苦しみは少しもない。ただ胸が冷たくなると、一層あたりがしんとしてしまった。ああ、何と云う静かさだろう。この山陰やまかげの藪の空には、小鳥一羽さえず囀りに来ない。ただ杉や竹の杪うらに、寂しい日影が漂ただよっている。日影が、——それも次第に薄れて来る。——もう杉や竹も見えない。おれはそこに倒れたまま、深い静かさに包まれている。

その時誰か忍び足に、おれの側へ来たものがある。おれはそちらを見ようとした。が、おれのまわりには、いつか薄闇うすやみが立ちこめている。誰か、——その誰かは見えない手に、そつと胸の小刀すがを抜いた。同時におれの口の中には、もう一度血潮が溢あふれて来る。おれはそれぎり永久に、中ちゆうう有の闇へ沈んでしまった。……

⋮

(大正十年十二月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集4」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年1月27日第1刷発行

1996（平成8）年7月15日第8刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

初出：「新潮」

1922（大正11）年1月

入力：平山誠、野口英司

校正：もりみつじゅんじ

1997年11月10日公開

2011年5月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

藪の中

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>